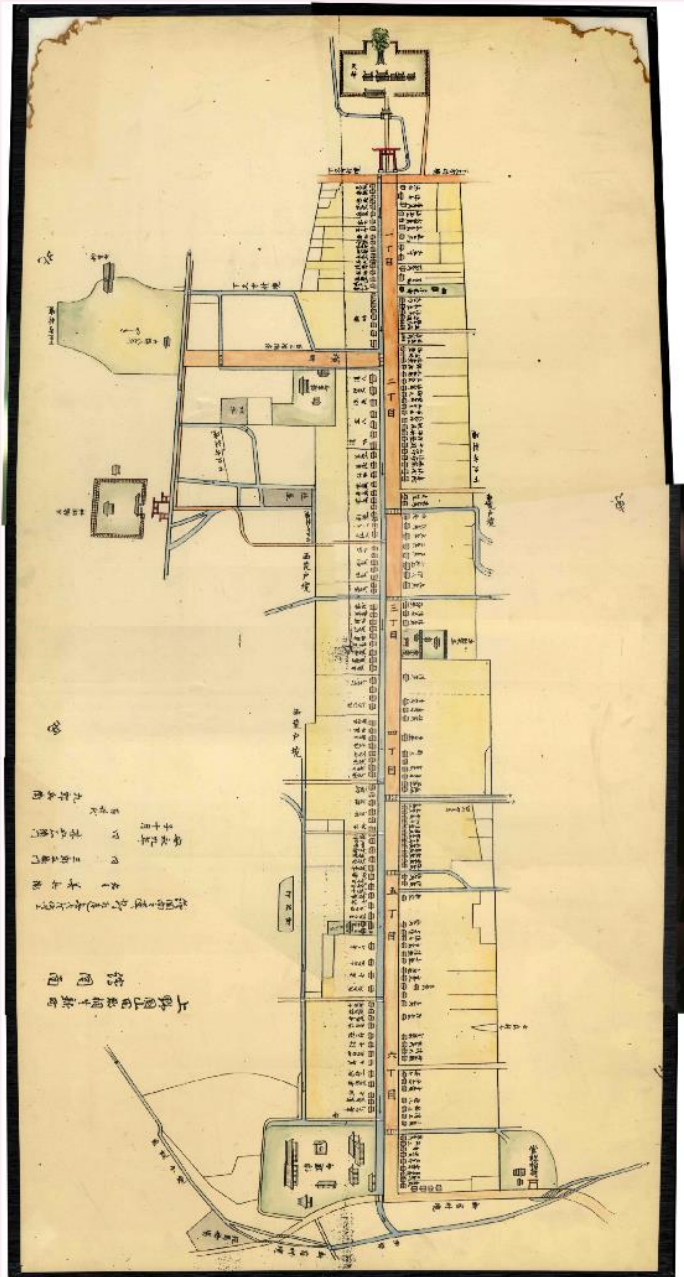


# 桐生新町



## 桐生新町の町並み(きりゅうしんまちのまちなみ)

この地区は、天正19年(1591)に徳川家康の命を受け、代官大久保長安の手代大野八右衛門により新たに町立てされ、在郷町として発展してきました。町立て当初から敷地形態とともに、当時から生産が行われ、近代の桐生を代表する産業である絹織物業を中心に発展した町の形態として、江戸後期から昭和初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業にかかわる様々な建造物が一体となり、製織町として特色ある歴史的な環境を今日に伝えています。

保存地区は、絹織物業を中心に発展した町、桐生を示す象徴的な地区でもあります。

## 桐生新町から本町へ(きりゅうしんまちからほんちょうへ)

町立て当初は「荒戸新町」と称し、その後「桐生新町」に変わりました。「桐生新町」という名称は、町立ての初期(1682年頃)から明治22年(1889)町村制が施行され桐生新町が近隣の村と合併し桐生町となるまでの名称です。

桐生町となった後も「桐生新町」の名は、桐生町大学桐生新町として大学名が残されていたが、大正10年(1921)の市制施行時に大学名が「桐生」に変更されています。

その後、昭和4年(1929)に町名が新設され字名が無くなり「本町」となりましたが、町の範囲は当時とほとんど変わらず、現在でも「桐生新町」という呼名が(特に、歴史的な町並みが残る本町一、二丁目を中心に)使われています。